自然界の厳しさ

「先生、つばめのヒナが落ちていました。」
今朝、私の前を通っていく生徒の中の数人から、声をかけられました。中央道ガードの天井と蛍光灯の間にある巣から、一羽のヒナが落下したようです。生徒たちの優しさが哀れなヒナを放っておかなかったのでしょう。大人なら何とかしてくれるだろうという期待が重くのしかかったように感じました。

「かわいそうだけど、そういう運命の子なんだよ。人間がもとに戻してもきっと育たないからね。」
私は冷酷な言葉しか返すことができませんでした。生徒たちをがっかりさせたかもしれません。冷たい人間だと思われたかもしれません。しかし、そう言うよりほかなかったのです。
私が三十歳ぐらいの時のことです。生徒がスズメのヒナを拾ってきたことがありました。私は箱を準備して仮設の巣を準備してやりました。しかし、生徒も私もどのように世話してよいものかわからず、退職されたある先輩教師に相談しました。
この方は「日本野鳥の会」の会員で、野鳥に大変詳しい方でした。世話の仕方を教えてもらえると思いきや、帰ってきたのは意外な言葉でした。
「なぜ拾ってくるんだ！そのヒナはそういう運命なんだ。かわいそうだと思うのは人間だけだ。」
だからとって、ヒナを捨てるのは忍び難く、箱の中で世話をすることにしました。しかし、ヒナは何も口にせず、徐々に弱っていきました。そして、最後には動かなくなりました。
「近くに親鳥がいるはずだ。人が触って人の匂いがついたヒナを親鳥は二度と育てることはない。そのままほっておくのがいちばんだ。」
身近なところに自然の厳しさがありました。小さな巣の中で孵(かえ)ったヒナたちは当然大きくなっていきます。要領のよいヒナは親鳥からたくさんエサがもらえます。その結果大きさに違いが出て、押し出(し)されて巣から落ちるヒナも出てきます。人間界にはない「自然淘汰(ぜんとうた)」というものですね。
地面では落ちたヒナが震えている。その真上にある巣の中では、食欲旺盛なヒナたちが親鳥の運ぶエサを我先にと競って食べようとしている。まさに対照的な光景でした。歩道の中央で震えていたヒナが人間や車に踏みつぶされないように、歩道の端に寄せるだけが、人間である私にできる精一杯のことでした。

（六月十八日　記）